できるようにして、実用性を高めたのが特徴。環境問題への取り組みの一環として、官公庁や法人向けに電気自動車の普及を図る狙いという。
　車両重量は千八百八十キロ。二人乗車時で四百キロの荷物を積めるほか、五人乗車時は二百五十キロの荷物が積載可能。
　シール形鉛電池二十六個を積み、一回の充電（八時間）で百キロ走行できる（１０・１５モード）。エンジンに当たる電動機は、最大出力四七キロワットの交流同期モーターで、最高速度は時速一〇〇キロ。同社は「ベース車に載せている二・二リットルディーゼルエンジン車よりも優れた加速性能がある」と説明している。
　希望小売価格は一千四十万円。問い合わせは同社法人営業部（０３・３５０８・５１７８）へ。

▼98/08/25　東京朝刊　18 頁　第２家庭面　T980825M18--53
非木材紙原料・ケナフ栽培に広がり　環境学ぶ教材や町おこしのテコに---
　木材パルプに代わる紙の原料として、森林保全の観点から期待されている植物、ケナフの利用が広がっている。神奈川県は今秋開く「かながわ・ゆめ国体」のポスターやパンフレット、表彰状などにケナフ紙を使う。自販機飲料のカップにも、ケナフ製品が増えてきた。製紙産業による大規模な商業利用の道はまだ遠いが、各地で市民による栽培が盛んだ。

　○地域で
　広島県安浦町。瀬戸内海に面した国道沿いのうどん店前に、青々としたケナフが風に揺れている。
　この店の経営者で、しょうゆ醸造業の木崎宜昭さん（五九）は「広島ケナフの会」の代表を務める。二年前の六月に発足した市民組織で、各地の「ケナフの会」の草分けだ。
　長男が参加する異業種交流の会でケナフを知った。当初は町に製紙事業を起こせないかと考えた。研究者や市民団体と情報交換を重ね、昨年には初めて「ケナフサミット」を同町で開いた。こうした活動から、ケナフのパルプ化を引き受けてくれる設備が全国にも少なく、大量生産は価格面で木材から作る紙に及ばないことがわかった。
　「現状では、ケナフはまだ手作り感覚を生かす材料のようだ」と木崎さんはいう。それを逆手にとって、小さなパルプ工場と紙すき工房を建てる計画だ。町に支援は求めるが、運営はあくまでも市民の非営利団体でする方針だ。高齢化が進む一方、東広島市などから新しい住民も移り住む町で、お年寄りに職場を提供し、新旧の住民が触れ合う場にもしたいと考えている。
　　＊
　＜ケナフ＞　アオイ科ハイビスカス属。春に種をまくと、秋の収穫時には茎の下部の直径が二―五センチ、高さが三、四メートルになる。東南アジアや中国、アフリカ、米国南部などで栽培されている。成長が速いため非木材紙原料として有望視されているほか、二酸化炭素の吸収量が多く、地球温暖化の防止にも役立つとされる。紙のほか、壁紙や建材、家畜の飼料などさまざまな利用法が研究されている。ただし、紙の原料としては現状ではコストが割高なのが欠点。朝日新聞社]

▼98/08/30　大阪朝刊　地方版　広島１面　0980830MHS1-03
恐竜の赤ちゃん作ったよ！　子どもらがごみ袋使い、環境も勉強／広島-
　針金ハンガーと紙製ごみ袋で恐竜の赤ちゃんをつくる工作教室が二十九日、広島市中区で開かれ、集まった子どもたち約五十人が熱心に取り組んだ。
　造形作家の亀井由美子さん（五一）が代表を務める市民グループ「サンタラ」の主催。環境問題を考えてもらおうと、ごみ問題を象徴するごみ袋で恐竜を作る。環境が激変すれば人類も恐竜のように滅びるという意味も込めての取り組みだ。
　インストラクターの指導を受けながら作り方を覚えた子どもたちは、ハンガーを曲げた骨組みに、ごみ袋を巻き付け、中に新聞紙を詰めて形を整えた。出来上がった作品はほとんどがゴジラのイメージ。中にはゴジラとガメラが合体したような恐竜も。女の子（六つ）は「とても楽しかった。また作りたい」と満足そうだった。［朝日新聞社]

▼98/09/11　大阪朝刊　地方版　広島１面　0980911MHS1-06
関川ダムなど６事業見直し　県の監視委が初会合　／広島---
　予算化されてから長年着工されなかったり、完成していなかったりする公共事業を再評価し、休止や中止を含めて見直す県事業評価監視委員会（委員長、金丸昭治・広島工大教授、五人）の初会合が十日、県庁で開かれた。関川ダム（広島市安佐北区）など六つの事業を再評価の対象となる重点審議事業に決めた。
　会合では、国の補助金を受けて県が実施する公共事業の中で、採択後五年過ぎても未着工▽採択後十年過ぎても継続中▽採択前の準備・計画だけで五年間が経過――などの条件を満たす道路、河川、ダム、港湾などの五十五事業が示された。このうち、関川ダムをはじめ久井ダム（御調郡久井町）▽吉野川改良事業（福山市）▽木江港（木江地区、大楡地区）高潮対策事業（豊田郡木江町）▽瀬戸田港改修事業（豊田郡瀬戸田町）の六事業を重点事業に決めた。
　委員会では、六つの事業を中心に、現地調査や地元市町村長の意見を聞くなどして、人口減や環境問題などの社会経済情勢の変化を評価。十一月に開く次回の会議で藤田雄山知事に出す意見をまとめる。［朝日新聞社]

▼98/09/11　大阪朝刊　地方版　広島２面　0980911MHS2-02
「環境番組」楽しく見て　県内の各局、秋から（メディアナウ）／広島-
　県内の放送局で今秋、環境問題をテーマに掲げた番組が目白押しだ。五年前から「地球派宣言」と銘打ったキャンペーンを続けている広島ホームテレビは十月から、これまで不定期に放映していた特別番組「地球派宣言」を週一回のレギュラー番組に昇格させる。中国放送もラジオ・テレビで相次いで環境特別番組を企画している。
　広島ホームテレビの新番組は「地球派宣言・地球の声を聞きたい」。担当は新人の川上亜希子アナ（二二）で、県内各地に出かけ、さまざまな体験を通じて地域の環境の現状や変化をリポートする。
　第一回は山県郡筒賀村に出かけ、枝打ちなどの林業作業の初体験をリポート。二回目は宮島でカヌーをこいでごみ拾いに挑戦する。
　川上アナは岐阜県出身で、今年三月に同志社女子大を卒業したばかり。今回が初めてのレギュラー番組となる。「環境問題と言っても難しく考えず、見ていて楽しい番組にしたい」
　放送は十月三日スタートで、毎土曜の午前六時四十五分から十五分間。これまでの特別番組と同様、コマーシャルは入れず、協賛社の企業名だけを字幕で流す。地方局が環境専門番組を制作、定時放送するのは全国的に珍しいという。
　同テレビは一九九三年から「地球派宣言」キャンペーンをスタート。これまでに中国山地のクマ、太田川のアオサギなどを取り上げた計十三本の特別番組を制作したほか、地球派塾（自然学校）の開校、講演会・フォーラムの開催などを実施。また、四月からはローカルニュース枠内に「地球派宣言」のコーナーを週に一回設けていた。
　番組プロデューサーの坂内裕一さんは「レギュラー番組化は当初からの目標だった。商品を選ぶ際に環境面への負荷を重視するようになるなど視聴者の意識もずいぶん変化し、企業もイメージに神経を遣うようになったのが大きい。こうした番組作りは広がっていくはずだ」と話している。
　○中国放送やＮＨＫも取り上げ
　中国放送も今春から「エコ・プロジェクト」と題したキャンペーンを展開している。今月二十七日午前十時からラジオで環境特別番組「きれいな水は家庭から」を放送するほか、宮島にしかいないとされるミヤジマトンボを取り上げたテレビ番組も制作中だ。担当者は「あくまで生活者の視点に立って、台所のごみ処理など身近な分野で具体的な提案をしていきたい」と話す。
　このほか、ＮＨＫ広島放送局は川と人とのふれあいを描く「にっぽん川紀行」を毎週火曜に全国枠で放送中。広島テレビやテレビ新広島などもニュース番組などでダイオキシン、環境ホルモンなどの問題を取り上げている。
［朝日新聞社]

▼98/10/16　大阪朝刊　地方版　広島１面　0981016MHS1-03
市民から反響千件も　多い魅力ある町への要望　広島市基本計画／広島-
　広島市が、作成中の「第四次市基本計画」骨子案に対する意見を市民から募ったところ、十五日までに一千件に迫る意見や要望が寄せられた。今月一日から二週間の募集期間に、「三百件集まれば」と見込んでいた担当課の予測の三倍以上。意見は計画案づくりや、それを具体的に検討する審議会などで参考にされるという。
　「基本計画」は、同市が描いた将来の都市像「国際平和文化都市」を実現するため、来年度から二〇一〇年度までの十二年間に市が取り組むべき行政施策を課題ごとにまとめたもの。このほど骨子案がまとまったことから、今月一日付の広報誌「総合計画特集号」で市民に公開し、意見を求めた。
　十五日までに集まった意見は計九百九十三件。交通網や公共施設といった都市基盤整備や魅力あるまちづくりを要望する意見が最も多く、次いで少子・高齢化社会への対応、教育の充実と人材育成などへの関心も高い。また、ごみの分別・減量やリサイクル、ダイオキシン類対策、自然環境の回復など環境問題に関する意見も目立っている。［朝日新聞社]